13 「統合（integration)」を再考する?!もう一つあった「大切な要素」?!

堂本　彰夫

(1)「協働」をミスリード？したのは、「統合（integration)」理念への一知半解だった?!

早速であるが、ここでは、先号（12）で書き切れなかったことがあるようにも思われ、果たして、それが何であったのかということを突き詰め、改めてそれを、ここに書き記し、そして、おそらく、それと関わってくると思われる、かの「統合（integration)」理念を再考することを目標にして、論を重ねていきたいと思う！すなわち、先号では、改めて、「教育協働」の意味と、それが実現すべき目的・目標（課題）を述べたつもりであるが、そして、そこには、徐々にではあるが（本当に時間が掛ったが？)、その目指すべき（本来の？）姿・形が見え始めてきてはいるが（あくまでも結果的にではあるが？)、一方では、まだまだ、そのための課題共有が不十分なのではないかということを記したつもりであった?!

しかしながら、書き終わって、改めてそれを読んでいくうちに、そこには何かが足りない？あるいは、これまでの主張を繰り返すだけで、新たな突破口（説得力？）となっていない？そのような思い、感触が、何故か俄かに生まれてきたのである?!果たして、それが何なのか？今更、何故、そういうことを言い出すのか？そんなことを思わないわけでもないが、近々、久し振りに、現職（最前線の？研究者）の人達との出会い（知り合いではあるが！)、そして、公民館と（小）学校との「協働」の新たな形（「社会教育士」の活躍の場づくりとしての、「公民館の分館活動」?!）の事例発表セミナーがあるので、現状では停滞している、教育分野への思惟活動の再開（活発化？）を期して、ここでの論考を急いだという次第である！

そこで、まず手始めに、ここでは、最近、改めて感じ出している、件の「教育協働」が唱導されるきっかけ（追い風？）となった、いわゆる「生涯教育（学習)」の主軸理念、すなわち「統合（integration)」の概念から、上記の、その不十分さの原因の一端を捉えてみたい！何故なら、そこに、重大な見落とし（言うなれば、その後の「ミスリード？」の主因？）があったのではないか？そう思えてならないのでもある?!だから、あんなに盛り上がった？「生涯教育（学習)」論議が、今は、ほとんど消え失せてしまっている?!

ただし、もちろん、一定の成果として、例えば「教育基本法」への規定、そして、名称としては、その後変わったが（生涯学習政策局→総合教育政策局)、そこにあった連携・協力（統合？）へのシフト変更は、かなりの不確定要素を孕んではいるものの、大勢としては評価されるものではある（根っからの社会教育関係者にあっては、かなりの憤懣もあるが！）?!要は、「総論」から「各論」へ、「理想（理念）論」から「現実（実体）論」へと、事態は変わっていったのだとも言える?!

とは言え、それはともかくとして、考えてみれば至極当然ではあるが、その不十分さは、訳語（引いては、提唱者のＰ．ラングランの原語？）の所為せいではなく、我々が、それによって得られる（求めようとした？）具体的な姿・形（or イメージ？）を共有出来なかった?!あるいは、そこにあった、一部の（本当は、そうではないのだが！)、言い換えれば、それまで教育界（もちろん学校教育を主軸とした？）から、あまり重要視されていなかった（ただし、切羽詰まっていた？）部分だけが採り上げられ（それは、いわゆる「社会教育」側の追い風 or 復権？という形で?!)、そこだけが喧伝・追求されてきた?!まさに、「協働」をミスリード？したのは、「統合（integration)」理念への一知半解だった?!そう言えるのかもしれないのである?!

(2) 改めて、そこに示されるべきは「(必要な)『全体』『完全』『総和』の意味」?!

ということは、そこにあった、本来は、最も重要な部分を見落としていた、欠落させていたということであるが（「生涯学習体系への移行」／「生涯学習社会の実現」には、事実上、学校教育側の変革のヴィジョンが連動しなかったということ！)、「生涯教育（学習)」は、あくまでも「教育全体」の問題・課題であったということである！?!だからこそ、私自身は、そのような、ある意味では不整合な施策・動きを懸念し、「教育（形態）の三層構造的把握の必要性」と、そして、それを受けた、「ＦＥ／学校教育とＮＦＥ／社会教育の協働による」、「ひとづくりとまちづくりの循環づくりの必要性」を、言わば構図的に示そうとしてきたのであるが、まだまだ、そのことの意義（推進力？）に気づかず（ある意味知ろうともせず？とは言え、分かる人には分かるという自負は、私にはあるが？)、まさにここまで来ているということであるが…?!

だが、いずれにしても、事態は変わってきたのである?!他ならぬ、その学校側のスタンスが、ある意味（皮肉にも？）本気で変わってきたのである！否、本当に変わらなければ、そちらの方が、にっちもさっちもいかなくなってきたのである?!しかしながら、残念ではあるが、その根本的な解決の方向性、否、その具体的な方途が、なかなか見出せないまま、苦悶し、そして、一部の人はそれに負け、さじを投げたり、そこから逃避してしまったりということにもなっているのでもある（顰蹙を買うかもしれないが、敢えて、このような表

現で書かせてもらいたい！）?!もちろん、そのきっかけ（直接の原因）は、子どもや親達との関係、それに起因する組織における孤立・孤独等があるであろうが、それを打破するだけの気力や体力が、ましてや生き甲斐ややりがいが、最早限界となってしまっているということである?!

それでも、せめて、自分（達）が、何故このようになっているのか？どうすれば、このような状態から脱することができるかの、辛いが、一方での「明るい未来？」が、ちょっとでも感じられる、描けるならば、まだまだ可能性はあると言えるであろう（もともとは、教育あるいは教職に惹かれて教師になったはずである？そのことを、忘れてはいけない！もちろん、論外の輩もいるにはいる！）?!それが、「(必要な)『全体』『完全』『総和』の意味」の追求であり、そこにおける自らの役割、ミッションの確認なのである?!

実は、それが、先の「最も重要な部分」にも直結してくるのであるが、その成否を左右するのが、改めて、かの「タテの統合（時間軸）」と「ヨコの統合（空間軸）」によって、「全体の統合（制度的統合）」をなすという捉え方、方向性の共有の有無なのである！しかし、それは、それだけでは、あくまでも「全体の見立ての手続き」であって、肝心な（説得力のある？）「目的論」とはならない（だから、私は、それを解決する？ために、「タテの統合（時間軸）」を実現するために（→目的論）、「ヨコの統合（空間軸）」がある（→方法論）というような関係づけで、そのことを克服（納得？）しようとしたわけである！それでも…？）?!では、どうするのか？

⑶ では、改めて、その「(必要な)『全体』『完全』『総和』」を導くものは何なのか？

ということで、改めて、そこに、どのような問題点（言い換えれば隘路？）があるのか？まさしく、そこが問われるわけであるが、今回、ひょんなことから（ある意味暇でもあったので？）、改めて、英和辞典を見てみると、「integration」とは、「集約（まとめる）」「統合（結びつける）」「統一（合体させる）」「融合（融和させる）」ではあるが、そうすることによって、(必要な)「全体」「完全」「総和」を創り出していくこととある（手持ちの辞典ではあるが、そんなには間違っていないであろう？）！

いやいや、「integration」という言葉（原語）の所為せいではなく、訳語「統合」の解釈・活用の問題であり、そこでの重要な要素、すなわち「『結びつける』『つなぐ』『集積する』ことによって、(必要な)『全体』『完全』『総和』を創り出していくこと」、とりわけ後半の「(必要な)『全体』『完全』『総和』を創り出していくこと」という部分への視点（配慮）が足りなかったということが、言葉（原語）の本来の意味からも明らかとなったということであるが、ここにまた、「統合」によるミスリード？があったものと思われる?!しかも、これは、ある意味では「致命的なミスリード？」であったとも言えるかもしれない?!

とにかく、これには、いささか驚きもするが、では改めて、その「(必要な)『全体』『完全』『総和』とは何なのか？ここでは、半分冗談ではあるが（否、本気かな？）、今回の「学校（教師）の働き方改革」とか「(部活の）地域移行」の問題を、例えば世間に信頼されている？著名人（林修氏とか池上彰氏とか！彼らは、最近、あるテレビ番組で、教育について対談していた！ある意味流石であった！）が、「学校（教育）と社会教育との協働」という表現（発想）で提唱して（or 触れて）くれたならば、大いに「山？」は動くかもしれない（もちろん、残念ながら、彼らには、そうした発想自体はないようでもあったが…笑）?!ただし、くどいようであるが、彼らが、そうした発言をしようがしまいが、客観的な事実としては、既にそうしたことは、動いているところは動いているし、ある意味、そのことは、まさに「教育としての理の当然」なのではある?!

そこで、これも、半分以上？思いつきの域を越えないが、実は、これは、数学（微積分学）でいうところの「導関数」と「微分係数」の関係に似ていると言えるのではないか（しかし、これは、素人の直感 or 遊び心！だが、そこにある integration/統合という考え方には、相通じるものがあることは言うまでもない？）！譬えて言えば、そこにおいて、「導関数」みたいなもの（ここでは問題解決のための構図枠組み）が分かれば、それぞれの地点での「微分係数（傾き）」（解→その時の解決状態）が分かるということであるが、要は、その「導関数」が「ひとづくりとまちづくりの循環づくり」、そして、「微分係数（傾き）」が、それぞれの、眼前の問題・課題ということである?!であれば、そこから、その「(必要な)『全体』『完全』『総和』」が導き出されるのではないかということでもある（まさに現今の「部活の地域移行」「教員の働き方改革」の問題・課題はそうである！）?!

最後に、上記は、あくまでも、言葉（概念）によるレトリックではあるが、大事なことは、その時々において、そうした発想や取り組み（教育協働）によって、何らかの解決、そして、そのことによって誰かが救われる、喜んでくれる、そういうことが大切なのだということである！ただし、それは、あくまでも、その時々の問題・課題が解決されるということであって、新たな問題・課題が、目の前に飛び込んでくるということでもある？けれども、そうした視点・取り組み（教育協働）の方向性の意義を見失うことなく、また同じように、しかも繰り返し、みんなが力を合わせて立ち向かっていけばよいということでもある！「教育」とは、まさに、そういう営みであり（積分？）、それ故に、尊いものなのである！このことを、決して忘れてはいけない！それが、ここで言う「(必要な)『全体』『完全』『総和』」だということである?!　　（つづく）